



第 4 号

2001年3月

目黒稲門会

発行人: 眞仁田勉 事務局長: 樋口定廣 編集人: 岩崎正夫
〒152-0003 目黒区碑文谷3-4-17
TEL: 03-3723-2637, FAX: 03-3723-9720

目黒稲門会会報

2001年新年懇親会、開催。佐山氏の講演に感動。

新年懇親会は1月14日(日)午後5時からウエスティンホテル東京で開催された。

第一部は講演会で、浅海幹事長の司会で進められた。まず眞仁田会長が新年の挨拶の後、当日の講演は、ノンフィクション作家佐山和夫氏。アメリカプロ野球初の日本人プレーヤー・ジャップミカドが、早稲田野球部出身の三神吾朗氏であったことをつぎとめるまでの波瀾万丈の物語であり、この三神吾朗氏を仲立ちする不思議な巡り合いが、目黒稲門会員の桑野祐光・八幡和三郎両氏の間であったことを紹介された。八幡氏による佐山氏の経歴紹介の後ただちに講演に入ったが、佐山氏の熱のこもった講演(裏面に掲載)終了後、感動の覚めやらぬ中で、三神氏次女順子さんの夫である会員の桑野氏から、三神吾朗氏の二人の息

女を始めとする縁戚の方の紹介があった。なかでも元東京女子医大附属病院長で現役の医師、96歳の三神美和さんのカクシャクたる立ち姿には、期せずして大きな拍手が起き会場を盛り上げた。第一部閉会の挨拶を述べた土川幹事長は、たまたま三神吾朗氏の母校甲府中学(現甲府一高)の後輩にあたり、和歌山県から遠路講演に上京された佐山氏に賛辞と謝辞を述べ、盛大な拍手のなか第一部を終了した。

第二部の懇親会は海沼副会長の総合司会で、鈴木副会長の挨拶に続き、元東映フライヤーズの名二塁手として活躍した松岡幹事から、稲門倶楽部(野球OB会)の会長大道信敏氏が紹介された。大道氏は、自分こそ佐山氏に次ぐ三神氏の認識者であると述べ、三神氏の遺族から寄託されているユ

ニホームは、野球部創立100年を機に野球部の安倍寮記念室に展示したいと挨拶された。

引き続き横山副会長の乾杯の音頭で会食に入り、場内各所に懇親の輪が広がった。今回は家族同伴のパーティーであり、20名を越す女性に参加されたが、円卓を囲んだ楽しい語り合いが続き、予定を半時ほどオーバーしたほどであった。

閉会にあたり、中沢副会長は出席者に御礼を述べ閉会を告げ、最後に小林一光氏の発声で「都の西北」を声高らかに歌い、なごやかな雰囲気の中に閉会した。

なお記念として、大竹幹事が苦心して作り上げた会員地図が配られた。これは会員の顔写真が目黒区地図のなかの居住地に表示されているという優れたもので、今後の一層の親睦に役立つと期待されている。

熱のこもった佐山氏の講演



2000年の北京・西安・上海——中国

日黒輪門会主催による中国旅行は、11月7日から12日までの5泊6日の日程で北京・西安・上海を観光して回った。参加者は真仁田勉（会長）と姪の亜紀・千香ご姉妹、阿部喜久雄（副会長）ご夫妻、樋口定広（事務局長）ご夫妻、林田雅敏（監事）ご夫妻、それに筆者と家内の総勢11名（参加者のうち、真仁田千香さんは現在、北京の大学に留学中で北京空港で私達一行に合流）。

私達は、真仁田氏を除き、中国旅行は初めてで、大きな期待と興味をもって出かけることになった。真仁田氏は、都庁に就職してから副知事時代を通じ、特に副知事の時に東京都と北京市の友好交流事業の取り決めをされた当事者として事務打合せ等のため、何回か中国を訪問され、それを含めると中国へは14回も行かれている。それだけに、中国について造詣が深く、一行の案内役として限られた時間内においては是非ともみたい観光地の選択をお任せすることになった。中国旅行が初めての私達にとって、まことに良き先達を得たと感謝している。

以下、日程にしたがって、主な観光地などを紹介してみよう。

北 京

11月7日（火）成田国際空港は小雨。北京は晴れ。

○成田国際空港午前10時40分発日本航空JL781便で一路北京へ。

午後2時30分空港にて現地ガイドの劉曉明さんの出迎えをうける。20人乗りの私達専用のマイクロバスでいったん北京ヒルトンホテルに立ち寄り、荷物を置く。

天壇公園

最初の観光地で、明・清朝を通じて皇帝が天の神に五穀豊穡を祀ったところである。天壇公園のシンボルは、ひときわ目立つ青い琉璃色の「祈年殿」で、高さ38メートルの丸い三重の堂宇が、北京の秋の青空に溶け合うその美しさに見惚れる。

○夜は、ニューオータニ長富宮飯店「牡丹苑」にて名物の北京ダックで夕食をとる。

11月8日（水）曇り空

明の十三陵

明代の皇帝13人が眠る陵墓が広大な山麓に点在しており、そのうちの一つ「定陵（長大な地下宮殿）」を訪ねる。入口から幅10メートルの大理石の道が門まで約100メートル続き、両側に石像の獅子、象、馬、麒麟、文官・武官の人物像が、向かい合って対をなしている様は壮観である。

万里の長城

人類史上最大の古代建造物「万里の長城・八達嶺」をロープウェイで登る。全長6千キロに及ぶ大城壁で、高さ約6～9メートル、厚さ4.5メートルあり、春秋戦国時代に辺境を守るためその一部を築き、後に秦の始皇帝が大増築を行った。人力だけでこのような偉大な城壁が作られたことは驚異であり、いかに当時の土木工事の技術水準が高かったかを物語っていると同時に、中国という国の底知れぬエネルギーと人間の力の偉大さをまざまざと見せつけられた感を強くする。

○夜は刀削麺で有名な山西料理の夕食をとる。

11月9日（木）曇り空

故宮博物院

かつて紫禁城と呼ばれ、約500年間にわたり、明と清の歴代皇帝が暮らした皇居である。東西の幅750メートル、南北の長さ960メートル、面積が72平方メートルで二重の城壁に囲まれている世界最大の宮殿である。城壁の外には豊かな水をたたえた幅52メートル、深さ6メートルのお堀がある。この広大な敷地の中に太和殿、中和殿、保和殿、珍宝館の豪壮な建物が連なっており、いずれも中国古代建築物の傑作といわれている。

故宮博物院に隣接している景山公園に登ると、故宮の全貌を見渡すことができる。

天安門登城

北京市の中心にある天安門は、1420年に建てられたが、その後、失火により消失し、1651年に再建されている。1949年10月1日、毛澤東主席が中華人民共和国の成立を高らかに宣言したところである。

天安門広場は44平方メートルあり、100万人を収容できる世界名城中最大の広場である。天安門広場の南には毛澤東主席の肖像画が飾られている正陽門、東には中国歴史博物館、西には1万人を収容することができる人民大会堂があり、いずれもその偉容を誇っている。

○北京空港を午後5時20分発の中国西北航空で西安に向かう。午後7時、西安空港にて現地ガイドの陳伝良さんの出迎えをうけ、宿舎で小休止ののち、唐華賓館内の「華清」にて広東風味の夕食をとる。



北京にて

西 安

11月10日（金）初雪が降る。

華清池

ここ西安は、紀元前11世紀のころから2千年にわたり隆盛を極めた唐の都・長安で、広大な城壁内には華麗な宮殿がそびえ、そこかしこに古きよき長安の香りが漂っている。日本に仏教の教えを広めた弘法大師（空海上人）がこの地で修業をしたり、唐文化に陶酔し一生をこの地に捧げた阿倍仲麻呂は有名である。西安で最初に訪ねたのは、玄宗皇帝とその寵愛を受けた楊貴妃のロマンスで有名で華清宮で、門を入ると華清池があり、池の中に美しい白い女性の裸体像がある。ここでは珍しく温泉が湧いていて、楊貴妃が入ったという湯殿を見物する。

なお、ここには日中戦争中、蒋介石が泊まった簡素な居室「五間庁」があり、裏山の「驪山」は、ここに逃げ込んだ蒋介石が張学良に捕らえられて監禁され、抗日民族統一戦線結成を強要されたという歴史上の出来事としても有名である。

兵馬俑抗

このたびの旅行で最も主要な観光地「兵馬俑抗」へ向かう。途中、中国を最初に統一した秦始皇帝（紀元前259年～前210年）の陵墓をバックに全員で記念写真を撮り、ほどなく兵馬俑抗に到着する。

1974年3月に地元の農民がここに井戸を掘ったとき、偶然にいくつかの陶片が見つかり、その後、考古学者が1年あまり実地調査をしたり試掘をしたりした後、大型の俑抗であると確認した。これが1号兵馬俑抗である。1号兵馬俑抗は東西が230メートル、南北62メートル、地表からの深さ4.5～6.5メートル、総面積1万4千余平方メートルの規模で、出土した陶俑、陶馬が約6千体と推定されているが、等身大の人や馬の陶俑、陶馬が整然と隊列を組み、あたかも地下の始皇帝を守護する巨大な軍団のように見られる。陶俑の形象はそれぞれ異なっていて、表情や態度が生き生きしており、中国古代彫塑芸術の珠玉といっても過言ではない。百聞は一見に如かず、ぜひ見学されるようお奨めしたい。

1976年に2号俑抗と3号俑抗が続けて発見され、それぞれ1号俑抗に劣らない重要な発見であるといわれており、今後の整備に期待したい。

出口で「秦始皇帝兵馬俑」（兵馬俑博物館編集）の冊子を購入すると、1号兵馬俑抗の最初の発見者である楊志発さん（老人）がサインしてくれる。

陝西歴史博物館

大雁塔の近くに唐王朝風作りの陝西歴史博物館がある。1991年の開館で陝西省から出土した数十万点の中から選ばれた逸品が展示されている。

大雁塔

三蔵法師が仏典の保存のために建てた楼閣で230余段の階段を登った屋上から西安市の全貌が望める。

○夜は姿も形もさまざまな蒸し餃子や水餃子を楽しむ西安名物「餃子宴」の夕食をとる。

唐楽舞の観劇

夜の8時30分から1時間、オプションとして唐楽舞を観劇する。中国風に美しく着飾った若い娘の舞踏の華やかさもさることながら、演目の中で、一人静かに横笛をふく老人の姿や、勇壮な太鼓の響きは、特に印象に残った。

の秋を満喫。

これから中国へ行かれる方へ



西安にて

上 海

11月11日(土) 西安は濃霧。上海は夕方から小雨。

- 昨夜降り積もった白一色の雪景色を見ながら西安空港へ向かう。濃霧のため雪の農村風景は見られなかったし、上海行きの離陸も少し遅れた。午前11時10分上海空港に着陸し、現地ガイドの胡潔婷さんの出迎えをうける。
- 上海は中国第二の大都市で、超近代的ビルが林立して壮観である。プラタナスの街路樹が立ち並び、昔懐かしいトロリーバスが走っている。街中には自動車や自転車も多く、ここでもそれらの間を歩行者が縫うように気忙しく歩いている。また、高架道路がビルの谷間を走っていたり、建設中のものも多く、街全体が活況づいているように見受けられた。

豫園

約400年の明代に繡允端という四川省の役人が両親のために作った庭園で、瀟洒な建物、見事な彫刻、池あり、築山あり、また奇岩ありと。まことに贅を尽くした庭園である。また、庭内を巡らす土塀の上には、青銅色の陶器で作られた空想の竜が2匹、互いに玉を奪い合うがごとく向かい合いながら、それぞれ50〜60メートルにわたって横たわっている構図は、見るものをして圧倒させられる。建物の壁に「此地有崇山峻嶺」の額がかかっていたが、まさに建物の窓から庭の景色を見て、さぞかし満足したことであろう。

上海博物館

上海博物館の一つで、いまから3,000年以上も前の青銅器や陶器を目の当たりにすると、あらためて中国の歴史の悠遠さに想いが及ぶ。収蔵品は、総数12万点余り、蔵書20万冊を数え、じっくり見たら到底一日では見切れないほど大きくて広い。

11月12日(日) 上海は小雨。

- 午前中、小雨降る上海を散策する。11時にはホテルを出発しなければならないので遠出はできない。
- 12時上海空港に着き、午後2時30分上海発日本航空JL792便で帰国の途に着く。



上海にて

以上、駆け足で私達が回った観光地を紹介したが、これから中国へ行かれる方々のために、気の付いた事例を挙げて参考に供したい。

◆時差

日本と中国との時差は、1時間の逆戻りとなる。すなわち、北京空港に着陸した時、私の時計は午後3時30分を指していたが、現地時間の午後2時30分にあわせる。

◆気候

11月における北京と西安の気温は0度前後とかなり冷え込むので、厚い下着にセーターなど重ね着するとよい。上海は15度で東京とほぼ同じ気温である。

◆両替

両替は空港、ホテルなどでしてもらえる。為替レートはほぼ13.5円が1元に両替される。例えば日本円の1万円は約740元に両替される。現地で買い物をする場合、100円の商品は日本円にして約1,350円と換算すれば、値段が高いか安いかの目安になる。なお、各地にある友誼商店では日本円が使えるので、多額の両替はしない方がよい。

◆道路事情

中国は、日本とは反対に自動車は右側運転である。したがって、道路を横断する時は、まず左を見て次に右を見る。信号のあるところでも、歩行者優先ではないようで、自動車は左折したり右折してくるので用心が肝要だ。

◆トイレ

中国旅行でトイレが汚れていたり、特に女性にとっては開けなくて恥ずかしい思いをしたと聞いて出かけたが、今回の私達の訪れた観光地や飯店、友誼商店などは無料できれいな施設が整っていて心配することはない。街中の有料トイレも比較的良好整備されていた。

◆宿泊ホテル

北京では「北京ヒルトン」に2泊、西安では「ハイアット・リージェンシー・西安」に2泊、上海では「しゃんはいJCマンダリン」に1泊、いずれも五つ星の高級ホテルであった。

冒頭に記したように、真仁田会長の姪の千香さんが、北京から上海までの全行程を私達一行に同行された。彼女は昨年9月から北京市の精華大学に留学されておられ、1年余りの留学にもかかわらず、かなり流暢に中国語を話されて、中国語のできない私達が困ったときには、早速に通訳の役を引き受けていただくなど、私達にとってどれほど心強かったか忘れることができない。ここにあらためて彼女に感謝の意を表するとともに、稔り多き成果を得て無事に留学を終えられるよう切に祈る次第である。

6日間の短い旅行であったが、古代における世界四大文明のうち、ここ中国が最も進んだ文化をもった地域ではなかったかと、強く印象づけられた旅でもあった。

おおむね高齢者集団であったが、真仁田会長の心配りに助けられ、終始なごやかな雰囲気の中で楽しく過ごすことができた。さらに怪我や病気になる者もなく、またスリや置き引きの被害もなく、無事に帰国できたのは幸いであった。謝謝。

(S27政経 土方 正巳 記)

「多摩丘陵を歩く会」～自然観察会～

お待たせしました。昨年春、天候の都合により一年間延期させて頂きました。地域の方々と一緒に、まだ緑の多い残る多摩丘陵を歩き、自然をいっぱい浴びて来ましょう！生物専門の先生にお連れ下さいます。「ご近所の方々、お孫様、お子様をお誘い下さい。」

日里福門会の地域貢献の一環として、地域の子供達に自然の素晴らしさ、大切さを体験して頂く企画しました。

記

日 時	4月28日(土) 雨天の場合は当日朝8時50分迄に電話連絡の上、4月29日(日)に変更
行 き 先	多摩丘陵 京王線「平山城址公園」を10時出発、夕方3時から4時頃同駅に戻ります。 丘陵を4〜5時間、行程8km程のハイキングです。
集 合	JR「日里駅」由手線、渋谷方面行きホーム先頭(日印：日里福門会旗) 朝7時50分集合、新宿までの切符を各自御用意下さい。
解 散	京王線「平山城址公園」夕方3時から4時頃
費 用	参加費無料、交通費は各自御負担下さい。 高、お子様(幼児〜大学生まで)のみ日里福門会で交通費負担(往程返金)
持 ち 物	お弁当、飲み物、雨具、数倍、筆記用具、観察ノート、虫眼鏡、カメラ、双筒鏡、植物図鑑等
講 師	東京学芸大学名誉教授、御徳大学教授、北野日出男先生(元東京学芸大学附属豊田小学校校長)
申し込み	4月15日(日)迄に集書で以下まで申し込み下さい。会員名、郵便番号、住所、電話番号、参加人数、お子様・学生さんは学年をお書き下さい。 (宛先) 〒153-0061 日里区中目黒5-22-25 大竹 一子 後日の集書内は略させて頂きますので、当日集合場所にお集まり下さい。
そ の 他	交通費は片道 JR日里駅〜新宿駅 大人160円 京王線新宿駅〜平山城址公園駅 大人330円 (日里駅では平山城址公園駅までの連絡切符は買えません) (京王線新宿駅〜新宿駅から高崎不動、さらに各駅で2駅目が1日の駅です。) ハイキングのため、ズボン、運動靴、帽子等、歩きやすい服装で御参加下さい。 御質問等は、大竹(TEL: 03-3712-7090)までお気軽にお問い合わせ下さい。

「山里の春 福島・花見山公園の桜を見る会」旅行部会

日里福門会恒例のお花見の日程が決まりました。今年は「あめのの福島」に、全山花見農家の山々が連なる見事な「花見山公園」へ春を満喫に行きませう。貸し切りバスの日帰りツアーです。

記

日 時	4月14日(土) 日里駅午前7:00出発
旅行代金	10,000円
代金に含まれる物	バス代、消費税、昼食用お弁当、福島の車中の飲み物代(ビール・お茶等)、おつまみ代、通信費等
行き先	日里駅(7:00出発)⇒<首都圏・東北道>⇒福島・花見山公園(桜・桃・桜・ツツジ等の見頃)⇒郡山・樹成山公園(桜1300本、花と緑の公園)⇒柏原(湯浅温泉のお宿)⇒<東北道・首都圏>⇒日里駅(20:00着)
申し込み方法	集書に会員名・郵便番号・住所・電話番号・参加人数を明記の上、申し込み下さい。詳細をお送りします。 申し込み参加者切 3月20日(火) 申し込み先 〒153-0061 日里区中目黒5-22-25 大竹 一子

「アメリカプロ野球 初の日本人プレーヤー・三神吾朗を追う」－佐山和夫氏の講演から

昭和33年・商学部卒 八幡和三郎

2001年の日黒協門会新年懇親会の催しは、ノンフィクション作家佐山和夫氏を迎えての講演会でした。

佐山和夫氏は、昭和11年生まれ、慶応義塾大学文学部英文科卒、スポーツ分野ノンフィクションの第一人者で、特にアメリカ野球への造詣の深い方です。著作は数多く列挙し切れませんが、「ベースボールと日本野球（中公新書）」や「ジャップ・ミカドの謎（文芸春秋社）」などが特に有名で、数多くの人に読まれています。皆様もぜひ一読ください。今回の講演は、この著書「ジャップ・ミカドの謎」の主題で、アメリカプロ野球初の日本人プレーヤーは誰かを調査し、遂にはその人が早稲田大学野球部の先輩で第2回アメリカ遠征チームのメンバーでもあった三神吾朗さん（明治41年入部）であることを突き止めるまでの、興味溢れるお話でした。

以下、佐山和夫氏の講演内容を、ご著書の「ジャップ・ミカドの謎」の記述で補い、三神吾朗さんのロマンに満ちた人生に迫ってみたいと思います。

今から十数年まえ、ニグロリーグの歴史を調べるため、アメリカを取材旅行していた佐山氏は、古い一枚の写真を見て仰天します。その写真は今から90年近く前の1913年のもので、当時の強豪チーム「オール・ネイションズ」のメンバーが写っていましたが、そのなかに日本人と思われる選手がいるのです。アメリカ野球を研究している佐山氏は、以前にも「オール・ネイションズ」のメンバーに、ジャップ・ミカドという日本人がいたらしいことは聞いていました。しかし、さし当たっての関心事の調査に追われていたため、そのままになっていたのですが、この写真を見た日を境に、この人が誰であるかの探索にのめり込んでしまったのです。

先ず「オール・ネイションズ」というチームです。このチームのオーナー兼監督はJ・L・ウイルキンソンという白人でした。特注した寝台車に、多くの人種の選手で構成するチームを乗せてアメリカ中をまわり、各地の強豪チームと試合をしていたのです。

佐山氏が見た写真がのっているコピーには、次のように紹介されていました。<このチームにはキューバ人、インディアン、日本人、白人、黒人などが混在していたが、アメリカ・スポーツの歴史のなかで、これほどの多民族からなる長期のチームを編成して成功したのは、これが最初であった。……>そして二人のキューバ人、三人の白人、二人の黒人などがなるメンバーのなかには、ミシガン大学卒の日本人と紹介されているジャップ・ミカドの名前があったのです。

「オール・ネイションズ」は、単なる「どさまわり」のチームではありませんでした。三人の白人選手は後に大リーグに上がり、ニューヨーク・ヤンキースやシカゴ・ホワイトソックスなどの選手になっていますし、投手陣の双璧黒人投手のジョン・ドナルドソンとキューバ出身のホセ・メンデスは、大リーグを含むレベルでも一流にランクされる投手だったのです。

1994年の秋、佐山氏はシカゴでジャップ・ミカドに関する資料を探していました。「オール・ネイションズ」はシカゴを中心に巡業していたからです。図書館を訪ね、当時の新聞から関係記事を調査していた佐山氏は、インディアナポリスの図書館でジャップ・ミカドについて述べている新聞記事に初めてめぐり合います。それは1914年6月5日の「オマハ・ワールド・ヘラルド」の「オール・ネイションズ」の紹介記事のなかにあり、<……・シカゴ大学出の日本人外野手ミカマ（Mikama）が、今週から「オール・ネイションズ」に加わるだろう>と書いてあったのです。またカンザス州キングマンの新聞「ザ・リーダー・クーリア」には<……・メンバーには、肌の色があまりにも黒いために大リーグには入れないキューバ人選手ホセ・メンデスのほか、イリノイ州ゲイルズバーグにあるノックス・カレッジでキャプテンをしていた日本人選手ナイト・マカミ（Naito Makami）……>という紹介記事があったのです。

佐山氏はその後も調査を進め、各地の新聞でジャップ・ミカドについての記事を見つけだします。しかし、その名前はミカド、ミカマ、マカミ、マクム、マック、カミ、マッカミ、マコミなどと書かれていて、出身校もミシガン大学、シカゴ大学、ノックス・カレッジと多種多様でした。

佐山氏はこの時の心境を、著書のなかで「私は迷路に迷い込んでいた。途方に暮れていたといっているのだろう。ジャップ・ミカドの正式の名前も、経歴も、何も分からないのだから」と書いておられます。

その後の調査で、ジャップ・ミカドはアメリカに遠征した日本の大学チームのメンバーだったらしいことが分かりましたが、これも決め手に

はなりません。まさにジャップ・ミカドの謎は、謎のまま消え去らねばならない運命にあるのかと思えました。

ところが佐山氏の友人、Y氏からの「ジャップ・ミカドというのは、早稲田大学の選手だった三神吾朗さんではないでしょうか」という電話で、一気に謎がとけてきます。前後してMikami（ミカミ）という名前が記載されている新聞も見つかりました。それは「ライアン・リポーター」紙の記事で<二回オール・ネイションズは、ドナルドソンが二塁打で出塁。ダンバーの犠打で三塁へ進んだ。そこで日本人選手ミカミ（Mikami, the Jap）が投手返しの猛烈な一撃。ドナルドソンが生還した。……>と書いてありました。そこには間違いなくミカミの名前があったのです。

ジャップという呼び方は、一般に日本人に対する蔑称といわれています。しかし佐山氏によれば、必ずしも蔑称だけではなく、普通の日本人をあらわす意味もあったそうです。特に新聞の見出しなどで、日本人を表すとき「Japanese」では長すぎるので、「Jap」と省略されたのなどがその例になります。

三神吾朗さんがジャップ・ミカドであると確信した佐山氏は、次なるステップに入ります。この時の心境を「彼の早稲田でのプレーぶり、ノックス・カレッジでの様子など、調べれば徐々に分かってくるだろう。それより問題は、彼の家族の方々が、一体、どこにおられるからだ。もしもご家族のどなたかにあうことができれば、「ミカドの謎」も本質的に解けるだろう。「オール・ネイションズ」に入団したいきさつなど、聞かせてもらえるかもしれない。その後、彼がどうされたかもぜひ知りたいところだ」と書いておられます。

三神吾朗さんの経歴や家族の状況は、ノックス・カレッジの同窓会記録にありました。

<三神吾朗、1889年（明治22年）生まれ 山梨県甲府市出身。1912年早稲田大学卒業。1916年から17年までイリノイ大学に在籍 修士の学位取得。1921年東京にて結婚 妻の名はMiyoko。子供はAtukoとJunkoの二人。三井物産に勤務 部長。のちにコトブキ・シーティング・カンパニー取締役。1958年死去。自宅は東京都日黒自由が丘。>がそれです。

時を経ずして佐山氏は当時93歳の美代子夫人に会うために自由が丘の三神家を訪問します。三神吾朗さんがジャップ・ミカドであることを確認するのが目的でした。しかし美代子夫人の話は期待通りにはいきませんでした。夫人は「早稲田で野球をやっていました。ノックス・カレッジでもキャプテンをしていたと聞いています。しかし日本にプロ野球ができた時も『プロなんて、あんなもの』と言っていましたから、アメリカでそれに携わっていたことはないと思います」とあっさり否定されてしまったのです。

期待は外れましたが、状況証拠からみて三神さんこそがジャップ・ミカドに違いないと思う佐山氏は、その後も調査を続けます。そして三神家は大地主で、錚々たる人物が輩出している地方の名家であることが分かってきます。また、当時の学生選手が夏休みに、プロ野球でプレーしている多くの例があることを知り確信を深めますが、三神さんがプロでプレーした決め手がありませんでした。

しかし、美代子夫人の写真を撮るために三神家を再訪した佐山氏は、遂に決定的な証拠に出会います。それは、夫人が「こんなものがあるのを思い出してね……」と出してくださった古い紙袋の書簡類のなかにありました。イリノイ大学の卒業証書、ノックス・カレッジのベナントなどと一緒に保存されていたものです。佐山氏は一通の絵葉書を見て、ギクリとしました。なんとその絵葉書の宛名は、「ミネソタ州スレイトン 三神吾朗様」で、そのあとに「オール・ネイションズ野球団気付（care of All Nations Ball Club）」と明記してあったのです。同じ宛名の手紙は他にも二通ありました。ながい探索のあと佐山氏は、遂にジャップ・ミカドが三神吾朗さんである証拠に辿りついたのです。

（あとがき）

会場には長女の淳子さん、次女の順子さんを始めご親戚の方が出席されましたが、特に姪にあたる三神美和さん（元東京女子医大附属病院長。96歳で現役の医師）が、「小学生の頃、吾朗叔父さんから海外遠征のお土産に赤いリボンを貰ったのは、忘れられない思い出です」と語ると、会場からは期せずして感謝のどよめきと拍手が湧き上がりました。

エンディングには、三神さんがノックスで愛唱していた「ティベラリー」のメロディーが流れ、感動とロマン溢れる講演会は終わりました。最後に、佐山先生本当に有り難うございました。和歌山県の田辺市からわざわざお出かけ頂き、心より御礼申し上げます。